

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 09-081386

(43)Date of publication of application : 28.03.1997

(51)Int.Cl.

G06F 9/44
G06F 9/44

(21)Application number : 07-233113

(71)Applicant : MAINDO ENG CORP:KK

(22)Date of filing : 11.09.1995

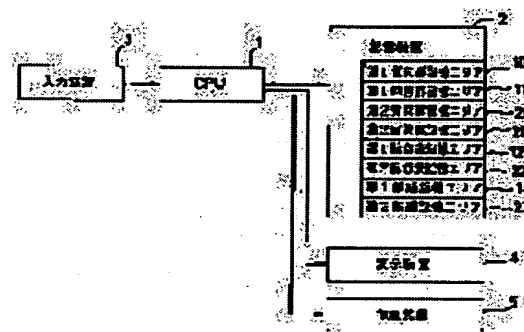
(72)Inventor : KIMURA JUNJI

(54) DEVICE AND METHOD FOR PROPER JOB DIAGNOSIS

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To display a function field matching the personality of a client.

SOLUTION: The proper job diagnostic device is equipped with an input device 3 which receives answers to a plurality of questions, a CPU 1 which allocates points to a plurality of personality types according to the answers to the questions and determines a representative personality type among the personality types and the degree of the representative personality type, and a display device 4 which displays the representative personality type and the degree of the representative personality type.



LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 11.09.1995

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number] 3098403

[Date of registration] 11.08.2000

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

BEST AVAILABLE COPY

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平9-81386

(43) 公開日 平成9年(1997)3月28日

(51) Int.Cl. ⁶	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
G 0 6 F 9/44	5 5 0		G 0 6 F 9/44	5 5 0 M
	5 7 0			5 7 0 A

審査請求 有 請求項の数12 OL (全 12 頁)

(21) 出願番号 特願平7-233113

(22) 出願日 平成7年(1995)9月11日

(71) 出願人 594076027

株式会社マインドエンジニアリングコーポ
レーション

東京都新宿区新宿5丁目12-2 昼田新宿
ビル1F

(72) 発明者 木村 順治

大阪府豊中市上新田1-24-E-308

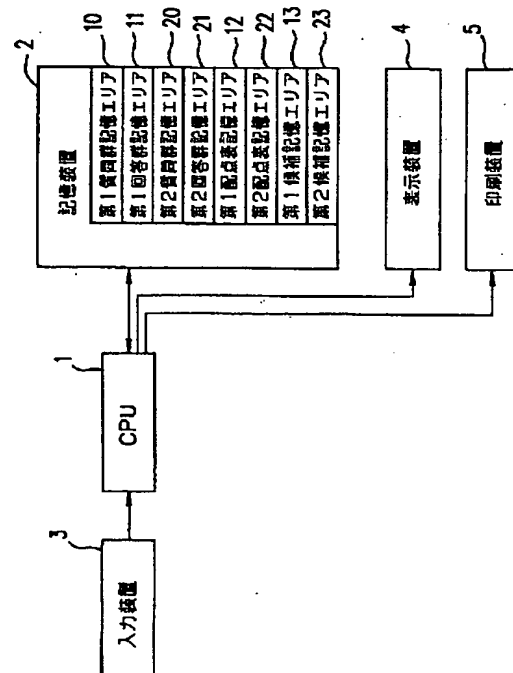
(74) 代理人 弁理士 山本 秀策

(54) 【発明の名称】 適正ジョブ診断装置およびその方法

(57) 【要約】

【課題】 クライアントの性格特性に適した職能分野を表示すること。

【解決手段】 適正ジョブ診断装置は、複数の質問に対する回答を受け取る入力装置3と、その複数の質問に対する回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点し、その複数の性格タイプのそれぞれに対する配点の分布に基づいて、複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定するCPU1と、その代表的な性格タイプと代表的な性格タイプの度数を表示する表示装置4とを備えている。



【特許請求の範囲】

【請求項 1】 複数の質問に対する回答を受け取る手段と、

該複数の質問に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する手段と、

該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する手段と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を表示する手段とを備えた適正ジョブ診断装置。

【請求項 2】 前記表示手段は、1 点を中心とする複数の扇型領域のうち 1 つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記代表的な性格タイプを表示し、かつ、該選択的に区別して表示された扇型領域に含まれる複数の線分であって該 1 点を通る複数の線分のうち 1 つの線分を選択的に区別して表示することにより該代表的な性格タイプの度数を表示する、請求項 1 に記載の適正ジョブ診断装置。

【請求項 3】 第 1 の質問群に対する回答と第 2 の質問群に対する回答とを受け取る入力手段と、

該第 1 の質問群に対する回答に応じて、第 1 の手法で適正ジョブの第 1 候補を決定する第 1 候補決定手段と、

該第 2 の質問群に対する回答に応じて、該第 1 の手法とは異なる第 2 の手法で適正ジョブの第 2 候補を決定する第 2 候補決定手段と、

該適正ジョブの第 1 候補と該適正ジョブの第 2 候補とを調停して、最終的な適正ジョブを決定する調停手段と、該最終的な適正ジョブを表示する表示手段とを備えた適正ジョブ診断装置。

【請求項 4】 前記第 1 候補決定手段は、前記第 1 の質問群に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する手段と、

該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する手段と、

該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数とに応じて、予め与えられた複数の第 1 候補のうち 1 つを選択する手段とを備えており、

前記第 2 候補決定手段は、

前記第 2 の質問群に対する前記回答に応じて、複数の性格因子のそれぞれに配点する手段と、

該複数の性格因子のすべてに対する該配点の総和と、該複数の性格因子のうち特定のグループの性格因子に対する該配点の総和とに基づいて、予め与えられた複数の第 2 候補のうち 1 つを選択する手段とを備えている、請求項 3 に記載の適正ジョブ診断装置。

【請求項 5】 前記調停手段は、前記第 1 候補決定手段によって決定された前記第 1 候補のフィールドおよびクラスと前記第 2 候補決定手段によって決定された前記第 2 候補のフィールドおよびクラスとに応じて調停を行

2

う、請求項 3 に記載の適正ジョブ診断装置。

【請求項 6】 前記表示手段は、1 点を中心とする複数の扇型領域のうち 1 つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記最終的な適正ジョブを表示する、請求項 3 に記載の適正ジョブ診断装置。

【請求項 7】 複数の質問に対する回答を受け取る工程と、

該複数の質問に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する工程と、

10 該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する工程と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を表示する工程とを包含する適正ジョブ診断方法。

【請求項 8】 前記表示工程は、1 点を中心とする複数の扇型領域のうち 1 つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記代表的な性格タイプを表示する工程と、該選択的に区別して表示された扇型領域に含まれる複数の線分であって該 1 点を通る複数の線分のうち 1 つの線分を選択的に区別して表示することにより該代表的な性格タイプの度数を表示する工程とを包含する、請求項 7 に記載の適正ジョブ診断方法。

【請求項 9】 第 1 の質問群に対する回答と第 2 の質問群に対する回答とを受け取る工程と、

該第 1 の質問群に対する回答に応じて、第 1 の手法で適正ジョブの第 1 候補を決定する工程と、

該第 2 の質問群に対する回答に応じて、該第 1 の手法とは異なる第 2 の手法で適正ジョブの第 2 候補を決定する工程と、

30 該適正ジョブの第 1 候補と該適正ジョブの第 2 候補とを調停して、最終的な適正ジョブを決定する工程と、該最終的な適正ジョブを表示する工程とを包含する適正ジョブ診断方法。

【請求項 10】 前記第 1 候補を決定する工程は、前記第 1 の質問群に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する工程と、

該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する工程と、

40 該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数とに応じて、予め与えられた複数の第 1 候補のうち 1 つを選択する工程とを包含しており、

前記第 2 候補を決定する工程は、

前記第 2 の質問群に対する前記回答に応じて、複数の性格因子のそれぞれに配点する工程と、

該複数の性格因子のすべてに対する該配点の総和と、該複数の性格因子のうち特定のグループの性格因子に対する該配点の総和とに基づいて、予め与えられた複数の第 2 候補のうち 1 つを選択する工程とを包含している、請求項 9 に記載の適正ジョブ診断方法。

【請求項11】 前記調停工程は、前記第1候補を決定する工程で決定された前記第1候補のフィールドおよびクラスと前記第2候補を決定する工程で決定された前記第2候補のフィールドおよびクラスとに応じて調停を行う工程を包含する、請求項9に記載の適正ジョブ診断方法。

【請求項12】 前記表示工程は、1点を中心とする複数の扇型領域のうち1つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記最終的な適正ジョブを表示する工程を包含する、請求項9に記載の適正ジョブ診断方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、予め用意された複数の質問に対する回答に基づいて、回答者の性格特性に適した職能分野（技術、営業、製造、総務、労務、経理など）を診断する適正ジョブ診断装置およびその方法に関する。

【0002】

【従来の技術】複数の質問に対する回答に応じて、人間の心の状態を診断するシステムとしては、株式会社マインドエンジニアリングコーポレーションによって販売されている心絵診断システム（H. C. S. : Heart Clinic System）が知られている。このシステムは、自然の風景のように時々刻々と変化する人間の心の状態を3次元のコンピュータグラフィックスを利用して風景画として表示するものである。クライアント（被診断者）は、その風景画を観察することにより、自分自身の心の状態を感覚的にかつ直感的に把握することが容易となる。また、その風景画の内容は、ハート・アーティストと呼ばれる専門のスタッフによって通訳され適切なアドバイスがクライアントに与えられる。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】企業のリストラクチャリングが進行する中、その企業が生き残ることができるか否かは、優秀な人材をどれだけ抱えているかに依存すると言っても過言ではない。業務用の心絵診断システムは、人材の潜在的な能力を把握しその能力をアップさせることにより企業における人材管理に資することを主要な狙いの1つとしたものであった。本発明の適正ジョブ診断装置は、人材の潜在的な能力の把握に加えて、その人材の職業的な能力をも客観的に測定できるように改良を施したものである。

【0004】本発明の目的は、予め用意された複数の質問に対する回答に基づいて、回答者の性格特性に適した職能分野を診断する適正ジョブ診断装置およびその方法を提供することにある。

【0005】

【課題を解決するための手段】本発明の適正ジョブ診断装置は、複数の質問に対する回答を受け取る手段と、該

複数の質問に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する手段と、該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する手段と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を表示する手段とを備えており、これにより、上記目的が達成される。

【0006】前記表示手段は、1点を中心とする複数の扇型領域のうち1つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記代表的な性格タイプを表示し、かつ、該選択的に区別して表示された扇型領域に含まれる複数の線分であって該1点を通る複数の線分のうち1つの線分を選択的に区別して表示することにより該代表的な性格タイプの度数を表示してもよい。

【0007】本発明の他の適正ジョブ診断装置は、第1の質問群に対する回答と第2の質問群に対する回答とを受け取る入力手段と、該第1の質問群に対する回答に応じて、第1の手法で適正ジョブの第1候補を決定する第1候補決定手段と、該第2の質問群に対する回答に応じて、該第1の手法とは異なる第2の手法で適正ジョブの第2候補を決定する第2候補決定手段と、該適正ジョブの第1候補と該適正ジョブの第2候補とを調停して、最終的な適正ジョブを決定する調停手段と、該最終的な適正ジョブを表示する表示手段とを備えており、これにより、上記目的が達成される。

【0008】前記第1候補決定手段は、前記第1の質問群に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する手段と、該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する手段と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数とに応じて、予め与えられた複数の第1候補のうち1つを選択する手段とを備えており、前記第2候補決定手段は、前記第2の質問群に対する前記回答に応じて、複数の性格因子のそれぞれに配点する手段と、該複数の性格因子のすべてに対する該配点の総和と、該複数の性格因子のうち特定のグループの性格因子に対する該配点の総和とに基づいて、予め与えられた複数の第2候補のうち1つを選択する手段とを備えていてもよい。

【0009】前記調停手段は、前記第1候補決定手段によって決定された前記第1候補のフィールドおよびクラスと前記第2候補決定手段によって決定された前記第2候補のフィールドおよびクラスとに応じて調停を行ってもよい。

【0010】前記表示手段は、1点を中心とする複数の扇型領域のうち1つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記最終的な適正ジョブを表示してもよい。本発明の適正ジョブ診断方法は、複数の質問に対する回答を受け取る工程と、該複数の質問に対する該回答

5

に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する工程と、該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する工程と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を表示する工程とを包含しており、これにより、上記目的が達成される。

【0011】前記表示工程は、1点を中心とする複数の扇型領域のうち1つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記代表的な性格タイプを表示する工程と、該選択的に区別して表示された扇型領域に含まれる複数の線分であって該1点を通る複数の線分のうち1つの線分を選択的に区別して表示することにより該代表的な性格タイプの度数を表示する工程とを包含してもよい。

【0012】本発明の他の適正ジョブ診断方法は、第1の質問群に対する回答と第2の質問群に対する回答とを受け取る工程と、該第1の質問群に対する回答に応じて、第1の手法で適正ジョブの第1候補を決定する工程と、該第2の質問群に対する回答に応じて、該第1の手法とは異なる第2の手法で適正ジョブの第2候補を決定する工程と、該適正ジョブの第1候補と該適正ジョブの第2候補とを調停して、最終的な適正ジョブを決定する工程と、該最終的な適正ジョブを表示する工程とを包含しており、これにより、上記目的が達成される。

【0013】前記第1候補を決定する工程は、前記第1の質問群に対する該回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれに配点する工程と、該複数の性格タイプのそれぞれに対する該配点の分布に基づいて、該複数の性格タイプのうち代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数を決定する工程と、該代表的な性格タイプと該代表的な性格タイプの度数とに応じて、予め与えられた複数の第1候補のうち1つを選択する工程とを包含しており、前記第2候補を決定する工程は、前記第2の質問群に対する前記回答に応じて、複数の性格因子のそれぞれに配点する工程と、該複数の性格因子のすべてに対する該配点の総和と、該複数の性格因子のうち特定のグループの性格因子に対する該配点の総和とに基づいて、予め与えられた複数の第2候補のうち1つを選択する工程とを包含してもよい。

【0014】前記調停工程は、前記第1候補を決定する工程で決定された前記第1候補のフィールドおよびクラスと前記第2候補を決定する工程で決定された前記第2候補のフィールドおよびクラスとに応じて調停を行う工程を包含してもよい。

【0015】前記表示工程は、1点を中心とする複数の扇型領域のうち1つの扇型領域を選択的に区別して表示することにより前記最終的な適正ジョブを表示する工程を包含してもよい。

【0016】

6

【発明の実施の形態】以下、図面を参照して、本発明の実施の形態を説明する。

【0017】図1は、本発明による適正ジョブ診断装置の一実施例の構成を示す。この装置は、予め用意された複数の質問に対する回答に基づいて、回答者の性格特性を分析し、その分析結果に応じてその回答者の性格特性に適した職能分野（技術、営業、製造、総務、労務、経理など）をディスプレイに表示するものである。本明細書では、性格特性の分析の対象となる者（回答者）を「クライアント」といい、そのクライアントの性格特性に適した職能分野を「適正ジョブ」ということにする。

【0018】この装置は、CPU1を中心にして、これに記憶装置2、入力装置3、表示装置4および印刷装置5を接続したものである。

【0019】CPU1はマイクロプロセッサを主体に構成されている。記憶装置2はランダムアクセスメモリ（RAM）を含み、CPU1の動作手順を規定するプログラムやCPU1によって処理されるべきデータを記憶する。また、記憶装置2に記憶されているデータはCPU1によって読み出される。記憶装置2には、第1の質問群のテキストデータを予め記憶するための第1質問群記憶エリア10、その第1の質問群に対するクライアントからの回答を記憶するための第1回答群記憶エリア11、第2の質問群のテキストデータを予め記憶するための第2質問群記憶エリア20、その第2の質問群に対するクライアントからの回答を記憶するための第2回答群記憶エリア21、第1配点表を予め記憶するための第1配点表記憶エリア12、第2配点表を予め記憶するための第2配点表記憶エリア22、第1候補を記憶するための第1候補記憶エリア13および第2候補を記憶するための第2候補記憶エリア23が含まれている。

【0020】入力装置3は、典型的にはキーボードとマウスとを有しており、クライアントがこの装置に所望のデータを入力することを可能にする。キーボードやマウス以外の入力装置を使用することももちろん可能である。入力装置3から入力されたデータはCPU1に与えられる。

【0021】表示装置4は、CPU1に入力されたデータやCPU1によって処理されたデータを表示する。印刷装置5は、CPU1によって処理されたデータを印刷する。

【0022】上述した構成の適正ジョブ診断装置は、たとえば共通のハウジングに組み込まれた単一の装置として構成されていてもよい。あるいは、CPU1及び記憶装置2が1つのユニットで構成され、入力装置3、表示装置4および印刷装置5はそれぞれ別のユニットとして構成され、それらがケーブルで接続されたものであってもよい。また、記憶装置2は、上述したようにRAMで構成されているものに代え、記録媒体が外部に取り出し可能なフレキシブルディスク装置等で構成されてもよ

い。

【0023】図2は、図1に示す適正ジョブ診断装置の処理動作を示すデータフローである。

【0024】ステップS1では、CPU1によって第1候補決定処理100が実行される。これにより、第1の質問群に対する回答に応じて、性格タイプの分析に基づき適正ジョブの第1候補が決定される。第1候補は記憶装置2の第1候補記憶エリア13に記憶される。

【0025】ステップS2では、CPU1によって第2候補決定処理200が実行される。これにより、第2の質問群に対する回答に応じて、多数の性格因子の分析に基づき適正ジョブの第2候補が決定される。第2候補は記憶装置2の第2候補記憶エリア23に記憶される。第1候補決定処理100の実行と第2候補決定処理200の実行はどちらが先であってもかまわない。

【0026】上述した第1候補と第2候補とは本来一致するはずである。しかし、第1の質問群と第2の質問群とは異なる側面からクライアントの性格特性を把握するように設計されているため、第1候補と第2候補とが一致しない場合もあり得る。そこで、第1候補と第2候補とが一致しない場合に、双方の分析結果を考慮して最終的な適正ジョブを決定する必要がある。このために設けられている処理が調停処理である。

【0027】ステップS3では、CPU1によって調停処理300が実行される。調停処理300の結果は、表示装置4に表示される。図3は、第1候補決定処理100の流れを示すフローチャートである。以下、このフローチャートに沿って、適正ジョブ診断装置の処理動作を具体的に説明する。

【0028】ステップS101では、CPU1は、記憶装置2の第1質問群記憶エリア10から第1の質問群のテキストデータを読み出し、その第1の質問群のそれぞれを表示装置4に表示する。これにより、クライアントに第1の質問群が提示される。表示装置4には、複数の質問が一度に表示されてもよいし、質問が1つずつ表示されてもよい。ここでは、説明の簡単のため、質問はテキストデータの形式で記憶装置2に記憶されているとしたが、もちろん画像データや音声データを伴うものであってもよい。

【0029】クライアントは、質問に対する回答を適正ジョブ診断装置に入力する。適正ジョブ診断装置への回答の入力は、入力装置3のキーボードの特定のキーを押下することにより、又は、入力装置3のマウスで表示装置4の画面上の特定の領域を指示することにより行われる。クライアントの代わりにオペレータが質問に対する回答を適正ジョブ診断装置に入力してもよい。しかし、クライアントのプライバシー保護の観点からクライアント自身が質問に対する回答を適正ジョブ診断装置に入力することが好ましい。

【0030】複数の質問に対する回答が効率よく適正ジ

ョブ診断装置に入力されるためには、質問とその質問に対する回答の選択枝とを表示し、クライアントが回答を容易に選択できるようにすることが好ましい。本実施例では、1つの質問に対する回答として、「1」～「7」の7とおりの選択枝のうち1つを選択する択一式を採用する。質問に対して完全に「いいえ」の場合は「1」、完全に「はい」の場合は「7」、その中間の場合はその程度に応じて「2」～「6」のいずれかの選択枝を回答として選択する。もちろん選択枝の数は7に限定されるわけではない。入力装置3から回答が入力されると（ステップS102）、入力された回答はCPU1に与えられる。CPU1は、その回答を第1回答群記憶エリア11に記憶する（ステップS103）。

【0031】図4は、第1回答群記憶エリア11に記憶された回答群の例を示す。この例は、質問1～質問5に対する回答がそれぞれ「4」、「4」、「7」、「1」および「2」であった場合を示している。すなわち、対応するフラグをオンにすることによって各質問に対する回答が第1回答群エリア11に記憶される。もちろん回答の記憶の形式はこれに限定されるわけではなく、例えば、回答の値そのものを記憶しておくようにしてもよい。

【0032】ステップS104では、CPU1は、第1の質問群のすべての質問が終了したか否かを判定する。第1の質問群の質問がまだ終了していない場合は、ステップS101に戻り、上述した各ステップが繰り返される。第1の質問群の質問がすべて終了した場合は、ステップS105に進む。

【0033】ステップS105では、CPU1は、第1回答群記憶エリア11に記憶された複数の回答に応じて、複数の性格タイプのそれぞれの得点を算出する。この得点の算出には、第1配点表記憶エリア12に記憶されている第1配点表が参照される。本実施例では、性格特性を3つの性格タイプに分類して、それぞれ「パニックタイプ（Pタイプ）」、「イキイキタイプ（Cタイプ）」、「無気力タイプ（Dタイプ）」というものとす。Cタイプは、PタイプとDタイプの中間のタイプを表すように設計される。

【0034】図5は、第1配点表記憶エリア12に記憶されている第1配点表の例を示す。第1配点表は、質問に対する回答に対して各性格タイプごとの得点配分を決めたものである。例えば、図5に示す第1配点表の第1行は、質問1に対する回答が「1」であった場合にはDタイプの得点に2点が加算され、質問1に対する回答が「4」であった場合にはCタイプの得点に2点が加算され、質問1に対する回答が「7」場合にはPタイプの得点に3点が加算されることを示している。このような計算により、質問1～5に対する回答が図3に示すようであった場合には、Pタイプの得点は2点（＝0＋0＋0＋2＋0）となり、Cタイプの得点は6点（＝2＋2＋

0+0+2)となり、Dタイプの得点は3点(=0+0+3+0+0)となる。この得点分布がクライアントの性格特性を示す。

【0035】ステップS106では、CPU1は、Pタイプ、CタイプおよびDタイプの得点分布に基づいて、クライアントがいずれの性格タイプに属するかを判定するとともに、そのクライアントが属する性格タイプの度数を算出する。そのクライアントは最大の得点を有する性格タイプに属すると判定される。すなわち、Pタイプの得点を「P」、Cタイプの得点を「C」、Dタイプの得点を「D」とするとき、 $P > C$ かつ $P > D$ ならばそのクライアントはPタイプに属すると判定され、 $C > P$ かつ $C > D$ ならばそのクライアントはCタイプに属すると判定され、 $D > P$ かつ $D > C$ ならばそのクライアントはDタイプに属すると判定される。例えば、質問1～5に対する回答が図3に示すようであった場合には、Cタイプの得点が6点であり最大であるため、クライアントはCタイプに属すると判定される。さらに、一口にCタイプといってもPタイプに近いCタイプもあればDタイプに近いCタイプもあると考えられる。性格タイプの「度数」とは、クライアントが属する性格タイプの他の性格タイプへの「偏り」の程度を示す。本実施例では、Cタイプは、 C_{P3} 、 C_{P2} 、 C_{P1} 、 C_{PD} 、 C_{D1} 、 C_{D2} および C_{D3} の7つの度数を有する。度数 C_{PD} は、PタイプにもDタイプにも偏らない典型的なCタイプであることを示す。度数 C_{Pn} は、CタイプのPタイプへの偏り度合いを示し、 n の数が大きい程Pタイプに近いCタイプであることを示す。一方、度数 C_{Dn} は、CタイプのDタイプへの偏り度合いを示し、 n の数が大きい程Dタイプに近いCタイプであることを示す。

【0036】同様にして、本実施例では、Pタイプは、 $P_1 \sim P_5$ の5つの度数を有する。度数 P_n の n の数が大きい程Cタイプに近いPタイプであることを示す。Dタイプは、 $D_1 \sim D_5$ の5つの度数を有する。度数 D_n の n の数が大きい程Cタイプに近いDタイプであることを示す。

【0037】性格タイプの「度数」は、上述したように、異なる性格タイプ間の偏りが反映されるように算出される。例えば、クライアントがCタイプに属すると判定された場合において、 $D > P$ かつ $3 \times (P + D) \leq C$ ならばCタイプの度数は C_{D1} であると決定され、 $D > P$ かつ $2 \times (P + D) \leq C < 3 \times (P + D)$ ならばCタイプの度数は C_{D2} であると決定され、 $D > P$ かつ $(P + D) \leq C < 2 \times (P + D)$ ならばCタイプの度数は C_{D3} であると決定される。例えば、質問1～5に対する回答が図3に示すようであった場合には、 $P = 2$ 、 $C = 6$ 、 $D = 3$ であるため、そのクライアントのCタイプの度数は C_{D3} であると決定される。

【0038】ステップS107では、CPU1は、クライアントが属する性格タイプとその性格タイプの度数と

に基づいて、予め与えられた複数の適正ジョブの候補のうちの1つを選択する。このようにして選択された候補が適正ジョブの「第1候補」して決定される。適正ジョブの第1候補の決定には扇型のチャートが使用される。

【0039】図6は、適正ジョブの第1候補の決定に使用される扇型のチャート600の例である。このチャート600は、後述する最終的な適正ジョブの決定にも使用される。チャート600は、「ゾーングラフ」と呼ばれる領域602と、「適正ジョブゾーン」とよばれる領域603とを含んでいる。ゾーングラフ602と適正ジョブゾーン603とは中心601を通る複数の線分によって複数の領域に区分されている。

【0040】ゾーングラフ602は、線分 P_1 と線分 P_5 とによって定義される「パニックゾーン」と、線分 D_1 と線分 D_5 とによって定義される「無気力ゾーン」と、その他の「イキイキゾーン」とに区分される。

【0041】適正ジョブゾーン603は、「技術」、「営業」、「労務」、「製造」、「経理」および「総務」の6つの職能分野に区分される。これらの職能分野はそれぞれ一部重複することがある。本明細書では、これらの職能分野のそれぞれを「フィールド」という。また、各フィールドは複数の領域にさらに区分される。本明細書では、この複数の領域のそれぞれを「クラス」という。例えば、フィールド「技術」は、クラス「技術(A)」とクラス「技術(B)」とクラス「技術(C)」とに区分される。このように、適正ジョブは、フィールドとクラスとによって特定される。

【0042】扇型のチャート600を区分する複数の線分のそれぞれは、いずれかの性格タイプの度数に対応する。図6に示されるように、扇型のチャート600を区分する複数の線分のそれぞれに対応する性格タイプの度数は、扇型のチャート600の円周に沿って示される。ステップS107では、CPU1は、ステップS106で決定された性格タイプの度数に対応する線分の左に近接するフィールドおよびクラスによって特定される適正ジョブを適正ジョブの「第1の候補」として決定する。例えば、質問1～5に対する回答が図3に示すようであった場合には、上述したように、クライアントの属する性格タイプはCタイプであり、その度数は C_{D3} であった。この場合、図6に示されるように、直線 C_{D3} の左に近隣する適正ジョブは「製造(B)」であるため、第1候補決定処理100による適正ジョブの「第1候補」は、「製造(B)」ということになる。

【0043】ステップS108では、CPU1は、適正ジョブの「第1候補」を記憶装置2の第1候補記憶エリア13に記憶する。「第1候補」の記憶の形式は問わない。例えば、「第1候補」を特定するフィールドの識別子とクラスの識別子とを記憶するようにしてもよい。

【0044】図7は、第2候補決定処理200の流れを示すフローチャートである。以下、このフローチャート

に沿って、適正ジョブ診断装置の処理動作を具体的に説明する。

【0045】ステップS201～ステップS204は、図3のステップS101～ステップS104と同様である。これらのステップにより、第2の質問群がクライアントに提示され、第2の質問群に対するクライアントからの回答が適正ジョブ診断装置に入力され、その回答が記憶装置2の第2回答群記憶エリア21に記憶される。

【0046】ステップS205では、CPU1は、第2回答群記憶エリア21に記憶された複数の回答に応じ、複数の性格因子のそれぞれの得点を算出する。第2候補決定処理200においては、クライアントの性格特性を15以上の詳細な性格因子に基づいて把握することにより、第2候補決定処理200における分析結果をクライアントの心的状態の分析にも応用可能なようにしている。このため、第1の質問群の数は35問程度で足りるが、第2の質問群の数は190問程度であることが好ましい。

【0047】本実施例では、説明の簡単のため、クライアントの性格特性を「集中力」「直観力」「忍耐力」「責任感」「積極性」「持久力」「慎重度」という7つの性格因子に基づいて把握することとする。

【0048】各性格因子の得点の算出には、第2配点表記憶エリア22に記憶されている第2配点表が参照される。第2配点表の構造は、図5に示す第1配点表の構造と同様であるので、ここではその説明を省略する。以下での説明のため、ステップS205での「配点」の結果、各性格因子の得点はそれぞれ以下のとおりであったと仮定する。

【0049】「集中力」：51点
「直観力」：30点
「忍耐力」：43点
「責任感」：68点
「積極性」：48点
「持久力」：39点
「慎重度」：27点

ステップS206では、CPU1は、7つの性格因子の得点の総和と、特定のグループの性格因子の得点の総和に基づいて、適正ジョブの「第2候補」を決定する。ここで、性格因子の得点の総和と適正ジョブとの関係は予め決められている。ここでは、性格因子の得点の総和が180点以上である場合においては、性格因子の得点の総和と適正ジョブ（フィールドとクラス）との間に以下のような対応関係が予め決められていると仮定する。

【0050】(1) フィールドが「技術」の場合

(a) 200点 \leq 性格因子の得点の総和<250点：クラス「技術(C)」

(b) 250点 \leq 性格因子の得点の総和<300点：クラス「技術(B)」

(c) 300点 \leq 性格因子の得点の総和<350点：ク

ラス「技術(A)」

(2) フィールドが「営業」の場合

(a) 180点 \leq 性格因子の得点の総和<230点：クラス「営業(C)」

(b) 230点 \leq 性格因子の得点の総和<280点：クラス「営業(B)」

(c) 280点 \leq 性格因子の得点の総和<320点：クラス「営業(A)」

例えば、上述の例では、7つの性格因子の得点の総和は、306点(=51+30+43+68+38+39+27)である。従って、上記(1)(c)に該当するから「技術(A)」が適正ジョブであると判定される。

さらに、上記(2)(c)にも該当するから「営業

(A)」もまた適正ジョブであると判定される。このように、性格因子の得点の総和だけでは、適正ジョブを1つに絞り込めない場合がある。異なるフィールド間では性格因子の得点分布が重複しているのが通常だからである。この場合、特定のグループの性格因子の得点の総和が所定のしきい値より大きい小さいかに応じて「技術

(A)」と「営業(A)」のうちいずれが適正ジョブであるかが決定される。特定のグループの性格因子としては、例えば、「忍耐力」と「責任感」と「積極性」が挙げられる。所定のしきい値は、例えば、120点である。上述の例では、「忍耐力」と「責任感」と「積極性」の得点の総和は、159点(=43+68+48)である。このようにして、営業(A)」が適正ジョブであると決定される。その結果、第2候補決定処理200による適正ジョブの「第2候補」は、「営業(A)」ということになる。ステップS207では、CPU1は、適正ジョブの「第2候補」を記憶装置2の第2候補記憶

エリア23に記憶する。「第2候補」の記憶の形式は問わない。例えば、「第2候補」を特定するフィールドの識別子とクラスの識別子とを記憶するようにしてもよい。

【0051】図8は、調停処理300の流れを示すフローチャートである。以下、このフローチャートに沿って、適正ジョブ診断装置の処理動作を具体的に説明する。

【0052】ステップS301では、CPU1は、記憶装置2の第1候補記憶エリア13から「第1候補」を読み出し、記憶装置2の第2候補記憶エリア23から「第2候補」を読み出す。

【0053】ステップS302では、「第1候補」のフィールドと「第2候補」のフィールドが一致するかが判定される。「第1候補」のフィールドと「第2候補」のフィールドが一致する場合には、「第2候補」を最終的な適正ジョブとして決定する(ステップS303)。「第1候補」のフィールドと「第2候補」のフィールドが一致しない場合には、そのフィールドギャップに応じたクラスの数だけ「第2候補」を「第1候補」に

近づく方向にシフトする(ステップS304)。ここで、フィールドギャップとは、異なるフィールド間の「距離」を規定するものである。この「距離」は、図6の適正ジョブゾーン603に示されるフィールド間の距離に対応する。例えば、フィールド「営業」を基準とした場合の他のフィールドとの間のフィールドギャップは、以下のように定義される。

【0054】

「営業」と「技術」との間のフィールドギャップ：1

「営業」と「労務」との間のフィールドギャップ：1

「営業」と「製造」との間のフィールドギャップ：2

「営業」と「経理」との間のフィールドギャップ：3

「営業」と「総務」との間のフィールドギャップ：4

上述した例では、「第1候補」は「製造(B)」であり、「第2候補」は「営業(A)」であった。この場合、フィールドギャップは2であるから、フィールドギャップに等しいクラスの数だけ「第2候補」を「第1候補」の方向にシフトすることになると、最終的な適正ジョブは「労務(A)」ということになる。このようにして、調停処理300によれば、異なる手法で求められた「第1候補」と「第2候補」とを調停して最終的な適正ジョブを求めることが可能となる。

【0055】ステップS305では、CPU1は、ステップS304で決定された最終的な適正ジョブを表示装置4に表示する。この場合、図6の適正ジョブゾーン603において、ステップS304で決定された最終的な適正ジョブのフィールドとクラスを他の領域と異なる表示態様で区別して表示することが好ましい。例えば、当該フィールドとクラスを他の部分と異なる色で表示したり、プリンキング表示したりすることが好ましい。これにより、クライアントは適正ジョブ診断装置による診断結果を容易に理解することができる。

【0056】このように表示されたゾーングラフ602と適正ジョブゾーン603は、印刷装置5によって印刷され得る。また、これらとともに文章で記載された「アドバイス」を印刷装置5に印刷するようにしてもよい。この「アドバイス」には適正ジョブに関する説明の他、クライアントの能力向上に関する説明が含まれ得る。例えば、適正ジョブ診断装置による分析により最適と診断された適正ジョブとクライアント自身が希望するジョブとが異なる場合には、この「アドバイス」には、クライアントがどのような行為を実践すればクライアント自身が希望するジョブが適正ジョブに近づくかという説明(処方箋)が含まれ得る。このような処方箋の出力は、適正ジョブのフィールドおよびクラスとクライアント自身が希望するジョブのフィールドおよびクラスとの間のギャップに応じて、予め用意された複数の処方箋のうちの1つを選択し、選択された処方箋を出力することにより達成される。

【0057】上述した実施例では、第1候補決定処理1

00によって求められた「クライアントが属する性格タイプ」と「その性格タイプの度数」とは表示装置4には表示されなかった。「クライアントが属する性格タイプ」に応じて図6に示すゾーングラフ602内の対応する領域を他の領域と区別して表示してもよい。「クライアントが属する性格タイプ」がPタイプである場合には、ゾーングラフ602の「パニックゾーン」を他と区別して表示する。「クライアントが属する性格タイプ」がCタイプである場合には、ゾーングラフ602の「イキキゾーン」を他と区別して表示する。「クライアントが属する性格タイプ」がDタイプである場合には、ゾーングラフ602の「無気力ゾーン」を他と区別して表示する。また、「その性格タイプの度数」に応じて図6のゾーングラフ602に含まれる複数の線分のうちの1つを他と線分と異なる表示態様で区別して表示してもよい。

【0058】また、上述した実施例では、「クライアントが属する性格タイプ」と「その性格タイプの度数」を第1候補決定処理100の一環として求めたが、第1候補決定処理100におけるステップS101～S106を独立して実行させ、その結果求められる「クライアントが属する性格タイプ」と「その性格タイプの度数」とを図6のゾーングラフ602上に表示するようにしてもよい。このように表示されたゾーングラフ602は、印刷装置5によって印刷され得る。また、ゾーングラフ602とともに文章で記載された「アドバイス」を印刷装置5に印刷するようにしてもよい。これにより、クライアントは自己の性格タイプの傾向を容易に知ることが可能となる。

【0059】また、上述した実施例では、性格特性をPタイプとCタイプとDタイプの3種類に分類したが、CタイプをさらにCM(熱意度)、CF(自信度)、CT(セルフコントロール度)の3つの因子に分類して分析してもよい。これは、Cタイプに属するクライアントが多いと予想されることから、さらに詳しい性格特性の分析を行うためである。このような分析を実現するためには、上述した図5に示す第1配点表において「C」とあるのを「CM」又は「CF」又は「CT」に置き換えて各因子ごとに得点を算出するようにすればよい。Cタイプの因子分析の結果(CM:CF:CT)は、例えば、円グラフを用いて表示される。

【0060】さらに、上述した実施例では、第2候補決定処理200によって求められた各性格因子の得点分布は表示装置4には表示されなかった。各性格因子の得点分布はクライアントの心の状態を反映する。従って、クライアントの心の状態を診断するために、各性格因子の得点分布を表示装置4に表示することは有用である。しかし、各性格因子の得点分布を個別に表示してもクライアントには何のことも理解できない。これらの性格因子の得点分布が全体として意味するところをクライアント

15

が感覚的かつ直感的に理解できるように表示することが肝要である。

【0061】図9は、性格因子を特定の絵柄の形態に対応づけることにより、クライアントの心の状態を表示する例である。図9に示す例では、性格因子「集中力」は絵柄「木の幹」に対応づけられている。性格因子「集中力」の得点は12レベルに区分され、各レベルごとに「木の幹」の太さや高さが変化する。また、図9に示す例では、性格因子「忍耐力」は絵柄「木の根」に対応づけられている。性格因子「忍耐力」の得点は4レベルに区分され、各レベルごとに「木の根」のはりぐあい

【0062】

【発明の効果】本発明によれば、予め用意された複数の質問に対する回答に基づいて、クライアントの性格特性に適した職能分野を表示することができる。これにより、そのクライアントの職業的な能力を客観的に測定することが可能となる。この測定は、そのクライアントの性格特性の分析に基づいているため、そのクライアントの潜在能力をも分析結果に反映させることができる。

【0063】また、クライアントの性格特性の分析を異なる2種類の手法で行い、個別の分析結果を統合することにより、そのクライアントの適正ジョブをより正確に把握することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明による適正ジョブ診断装置の一実施例の構成を示す図である。

【図2】図1に示す適正ジョブ診断装置の処理動作を示すデータフローである。

すデータフローである。

【図3】第1候補決定処理100の流れを示すフローチャートである。

【図4】第1回答群記憶エリア11に記憶された回答群の例である。

【図5】第1配点表記憶エリア12に記憶されている第1配点表の例である。

【図6】適正ジョブの第1候補の決定に使用される扇型のチャート600の例である。

【図7】第2候補決定処理200の流れを示すフローチャートである。

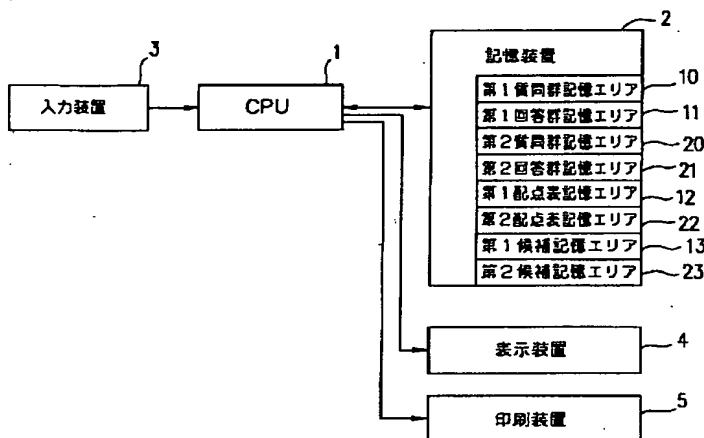
【図8】調停処理300の流れを示すフローチャートである。

【図9】クライアントの性格因子の分析に基づき、そのクライアントの心の状態を表示する例である。

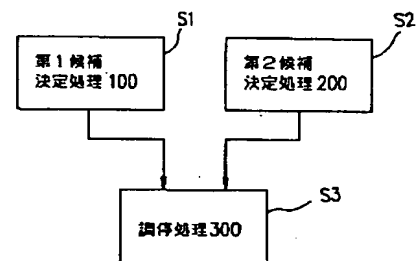
【符号の説明】

- 1 CPU
- 2 記憶装置
- 3 入力装置
- 4 表示装置
- 5 印刷装置
- 10 第1質問群記憶エリア
- 11 第1回答群記憶エリア
- 12 第1配点表記憶エリア
- 13 第1候補記憶エリア
- 20 第2質問群記憶エリア
- 21 第2回答群記憶エリア
- 22 第2配点表記憶エリア
- 23 第2候補記憶エリア

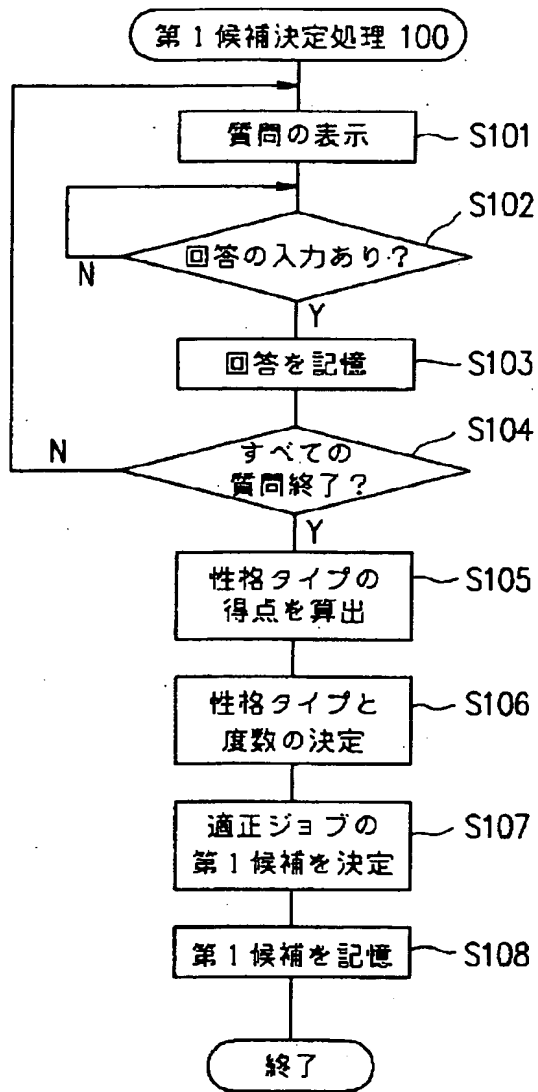
【図1】



【図2】



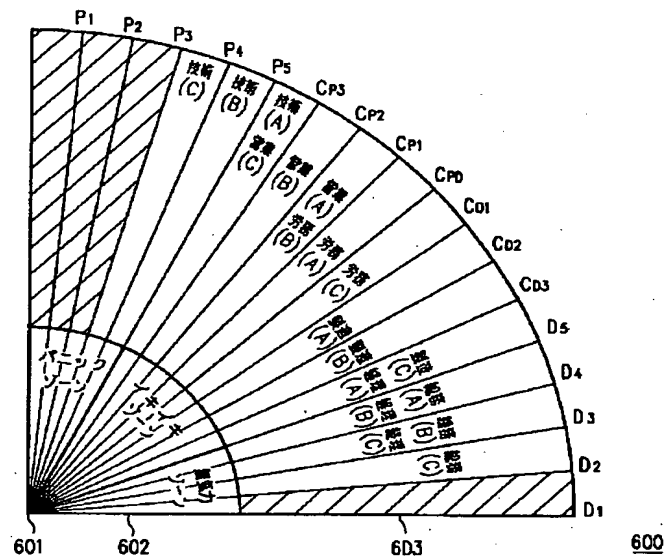
【図3】



【図4】

質問 NO	回答						
	1	2	3	4	5	6	7
1				1			
2				1			
3							1
4	1						
5		1					

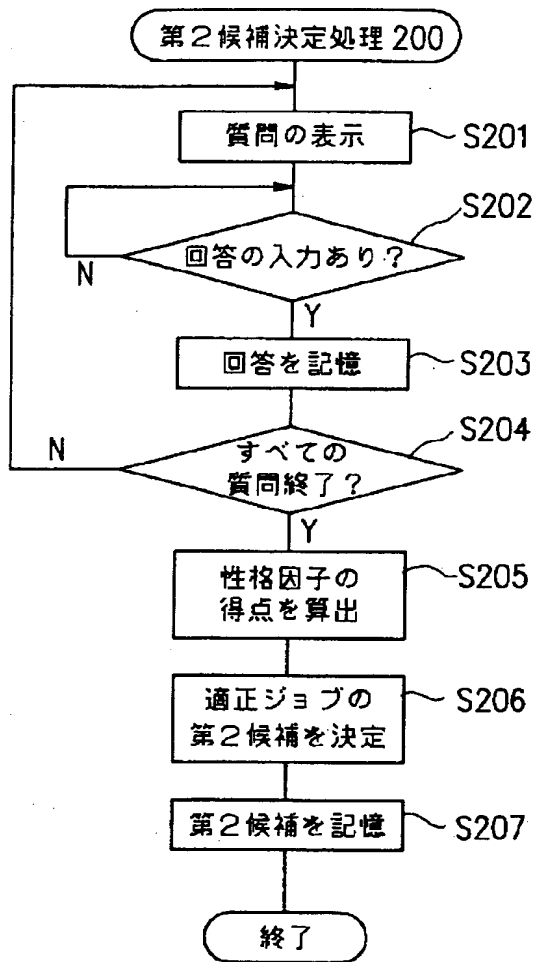
【図6】



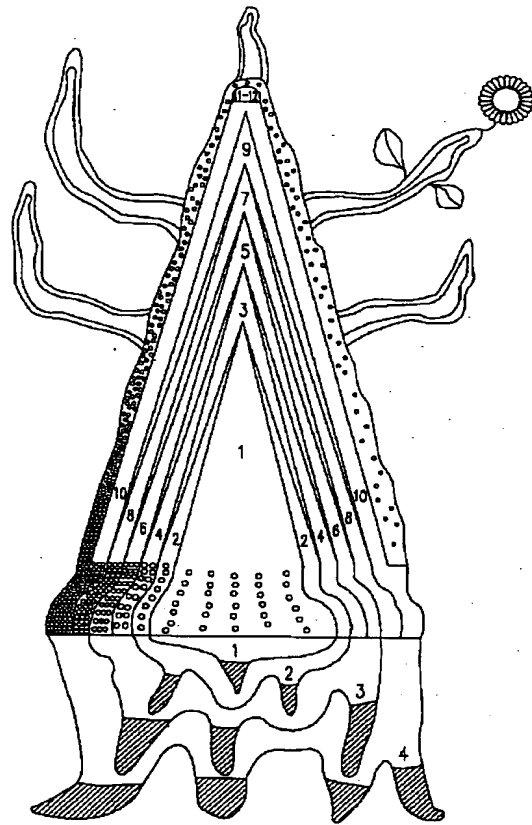
【図5】

質問 NO	回答						
	1	2	3	4	5	6	7
1	2D	2D	1D	2C	1P	2P	3P
2	2D	1D	1C	2C	1P	2P	3P
3	2P	2C	2C	1D	2D	3D	3D
4	2P	1P	2C	1C	1D	2D	2D
5	1C	2C	2C	2C	2C	2C	3C

【図 7】



【図 9】



【図8】

